

氏 名	ハットリ ケニヤ 服部 剣仁矢
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	人博 第129号
学位授与の日付	平成30年3月25日
課程・論文の別	学位規則第4条第1項該当
学位論文題名	『古事記』の研究―刀剣の記述を中心に
論文審査委員	主査 教 授 飯田 勇 委員 教 授 猪股 ときわ 委員 准教授 近藤 瑞木

【論文の内容の要旨】

『古事記』において、天孫降臨から神武東征に至る過程は、重要なものとして様々に論じられてきた。その中には、国譲りと神武東征という二つの征服譚が存在し、地上の神や人が如何に服属していったかが語られている。その二つの征服譚において、必要不可欠な存在として語られているのが建御雷神である。建御雷はこれら天皇誕生に至る征服譚において刀剣の神として描写されており、天皇の支配確立において刀剣という要素に意味があったことを示唆する。

建御雷は、火神・迦具土を伊耶那岐が刀剣で斬り殺す中で生まれたと、国生み・神生みの箇所記されており、『古事記』の中で広く連絡を持つ神でもある。さらに建御雷との関連は指摘されていないが、中巻末尾にも建御雷に関わる刀剣の要素がうかがわれる。応神記に記載される吉野国主等による大雀の佩刀称赞の歌は、「ひのみこ」という歌句や吉野国主である点から、神武東征と関連するものと考えられており、大雀が次期天皇（仁徳）となることを保証する歌とされる。この大雀賛美の歌は、大雀の佩刀をほめる歌である。そして神武東征で吉野国巢の祖が現れる吉野は、建御雷の刀剣によって危機を救われた直後に、天神御子（伊波礼毘古）が訪れる場所である。ここにも関連を見るならば、建御雷を軸とする刀剣の要素は、『古事記』の重要な箇所、特に天皇の地上支配確立に関わる箇所に、深く広く関係していると考えられる。少なくとも、皇子の次期天皇即位が刀剣の讃美として表現されている点は間違いない。

また一方で、有名な『古事記』の草那芸剣があり、上巻ヲロチ退治で出現した後、やはり『古事記』を横断して複数箇所で語られており、一連の物語を形成している。この剣も、邇々芸命が葦原中国に降臨する際や、倭建が東国に向かう際に授けられるなど、天孫・皇族にとって何かしらの必要なものであったと考えられる。

さらには文化史や考古学の研究は、古代において刀剣は呪力を持ち政治や宗教など社会に広く関わる重要なものであったことを示唆している。『古事記』に当時の社会が直に反映しているなどとは全く思わないが、このような状況においては、『古事記』において刀剣が重要な存在であることは十分にあり得る。

しかしこれまでの『古事記』の研究において刀剣という要素は重視されておらず、テキストにおいてどのような働きをし、意味を担うかといったことはあまり考えられてこなかった。しかし刀剣は『古事記』一定の重要性をもっていた可能性が高い。

こういったことを踏まえ、本研究は刀剣が『古事記』において重要な要素であると仮定し、『古事記』の刀剣の記述に着目することで、『古事記』のテキストのあらたな一面を明らかにすることを試みるものである。

具体的な構成は次の通り。

第一部 天皇の地上支配と刀剣

第一章 『古事記』における火神被殺—迦具土殺害と刀剣神の生成

第二章 「力競」の叙述とその意味—『古事記』国譲りに関する意義

第三章 大雀の刀剣と天皇の資格—『古事記』応神記の吉野国主等の歌

第四章 箭製造から見る軽太子と穴穂御子の対立—『古事記』の弓矢

第二部 地上の刀剣

第五章 「大刀」出現譚としての『古事記』ヲロチ退治

第六章 『古事記』における草薙剣—遍歴する刀剣

第七章 阿遲鉏高日子根神の位置づけ—『古事記』の刀剣の特質から

第三部 『古事記』の外の刀剣

第八章 『日本書紀』における草薙剣—記紀のクサナギの剣

第九章 枕詞〈剣大刀身に副ふ〉の論理—『万葉集』巻二・194～195番歌

第十章 「鞘」が喚起するイメージ—『万葉集』巻七・1272番歌

「第一部 天皇の地上支配と刀剣」は、建御雷を軸として、天神の地上支配確立に関わる刀剣の話を集めた。第一章、第二章、第三章が建御雷に直接関わる話で、刀剣神の誕生から国譲り、神武東征を扱い、天皇の地上支配確立に到る征服を、刀剣という側面からとらえなおす。それにより、天孫にとって接触不能な異質な領域として現れていた地上世界を、刀剣が媒介して回路を開き、征服を可能とすることを示す。そしてそのような働きを可能とする刀剣の特質が、迦具土殺害の場面によって現れていること第一章では述べ、国生み・神生み神話の王権の為の神話としての側面を指摘した。一方で第三章では、刀剣と地上征服の関わりを踏まえたうえで、大雀の次期即位を保証する歌が佩刀賛美であることの意味を考察し、大雀もまた地上征服をなした刀剣の力を発揮できる存在として語られていることを述べた。第四章に弓矢の話があるのは、この箭製造の挿話が次期天皇を争う皇子の対立の中で語られており、天皇としての資質に弓矢に関わるとされる為である。同じように天皇としての資質を語る際に、弓矢と刀剣でどう異なるかを捉えることで、刀剣のあり方を改めて特徴づけるねらいがある。結果として異質なものを征服することを媒介する刀剣と異なり、臣下を率いて共に戦う武器として、皇子同士の争いに相応しい武器として弓矢は語られていた。

「**第二部 地上の刀剣**」は、第一部が高天原に属し、天神に使役される刀剣神（特別な刀剣）を扱ったのに対し、天神にとって異質な、地上のヲロチから取り出された草那芸剣を軸に刀剣の記述に注目する。ただ第一部で扱った建御雷にしても高天原の神にとっては異質な面があり、第二部は地上に根拠を持つ刀剣を扱うことで、『古事記』の刀剣が持つ王権にとって異質な面から『古事記』の叙述を考えていこうというものである。第五章ではヲロチ退治譚でヲロチ退治を通して「大刀」を獲得することの意味を、第六章では獲得された草那芸剣が『古事記』の小さな物語を越えて遍歴していく様子を捉えた。第七章は草那芸剣ではないが、刀剣神とも言われる国神・阿遲鉏高日子根を取り挙げ、刀剣という面から『古事記』でのこの神の位置づけを探った。

「**第三部 『古事記』の外の刀剣**」では『古事記』以外のテキストを刀剣の記述を中心に分析する。比較を通して『古事記』の分析を特徴づけると共に、刀剣の記述に着目したテキストの分析が『古事記』以外でも有効かどうかを試す。第八章は『日本書紀』において、『古事記』と同じクサナギの名を持つ刀剣の展開を追う。第六章の写しである。クサナギの剣を巡る記紀の比較と、そのような二つのクサナギ譚が並び立つ状況についての考察する。第九章、第十章は『万葉集』の刀剣を用いた表現に冠する論を並べた。現代的感覚では刀剣と恋歌は一見そぐわないようにも思うが、『万葉集』には相聞歌に関わる刀剣を用いた表現が少なからずある。この二章ではひとつの歌の解釈を刀剣表現に着目するかたちで行った。権力や征服とは直接関わらないテキストを刀剣の記述を通して解釈した。

第一部と第二部で見出したものを、第三部で別の視点から相対化する、という構造になっている。

そして全体を通しては、テキストの中で刀剣が担う意味や役割を分析することで『古事記』の再解釈を試み、具体的には『古事記』における天皇の地上支配の様相の捉え直しを試みた。そして、高天原の天神にとって異質な地上世界（葦原中国）と接触し、征服し、支配する為には、地上と同様の異質性を内包した刀剣の働きが不可欠であったことを述べた。そしてそれは、『古事記』の天皇が地上とは異なる領域に根拠を持つという問題でもあることを述べた。天上に由来を持つ『古事記』の天皇にとって地上が本質的に異質であることはこれまでも指摘されてきたが、本研究でも刀剣という面から改めてそれを確認し、刀剣がその違和を解消する為のひとつの要素として語られていることを示した。

第一部 天皇の地上支配と刀剣

第一章 『古事記』における火神被殺一迦具土殺害と刀剣神の生成

第二章 「力競」の叙述とその意味―『古事記』国譲りにおける意義

第三章 大雀の刀剣と天皇の資格―『古事記』応神記の吉野国主等の歌

第四章 箭製造から見る軽太子と穴穂御子の対立―『古事記』の弓矢

第二部 地上の刀剣

第五章 「大刀」出現譚としての『古事記』ヲロチ退治

第六章 『古事記』における草那芸剣―遍歴する刀剣

第七章 阿遲鉏高日子根神の位置づけ―『古事記』の刀剣の特質から

第三部 『古事記』の外の刀剣

第八章 『日本書紀』における草薙剣—記紀のクサナギの剣

第九章 枕詞〈剣大刀身に副ふ〉の論理—『万葉集』巻二・194～195番歌

第十章 「鞘」が喚起するイメージ—『万葉集』巻七・1272番歌

- ・大まかな流れ
 - ・天皇の地上支配確立
 - ・地上の刀剣（王権の外側に属する）
 - ・実は大して変わらない。
 - ・別視点
- ・各章の具体的な内容

○結論

- ・地上の異物である天皇の媒介

本研究の構成と内容は次の通り。

第一部の大きなテーマは、支配と被支配、高天原に根拠を持つ天孫・天皇が、地上の神と人を支配するという非対称的な関係がどのように支えられているのか、ということの一端を刀剣という面から明らかにすることを目指した。その為に天皇の地上支配に関わる征服譚における刀剣要素・建御雷の問題を取りあげている。

国譲り—神武東征の連絡に関しては既に様々に指摘があり、神武東征—大雀の佩刀称赞（吉野国主等の歌）の連絡も、「吉野国主」を媒介にして既に指摘されている。本研究ではさらに迦具土殺害までも含め大きな流れとして捉える。そしてこれまで注目されていなかった刀剣という共通点に着目して分析した。この点に、本研究の新しさがある。具体的な論証は本論に譲るとして、結論としては、刀剣神・建御雷には「雷」という『古事記』の王権にとっての荒ぶる自然が含まれており、そのため建御雷は、天孫が触れることのできない地上の荒ぶる神（自然を含む）と天孫の接触を媒介しつつ、一方的な関係を構築することを述べた。一方で第四章で取りあげた弓矢は、皇族同士の争いにおいて、臣下を率いて戦う武器として存在しており、刀剣とは反対に同質なものの同士の相対において意味を持つものであることを明らかにした。この箇所は軽太子が皇位継承の資格を失い、穴穂御子が皇位を継ぐ資格を得る話であることは明らかでありながら、歌と散文など他に重要な問題があった為に二人の皇子が「箭」を製造する記述が古い研究の段階で長らく放置されていた。『古事記』に即してこの箭製造の記述と皇位の関係を説き、研究を進めた点にも、武器に着目した意義があった。

第二部は第一部で触れた、『古事記』の王権にとって刀剣は必須の存在である一方で異質な存在でもある、という点を地上から取り出された草那芸剣を中心にする事でより明確化した。これまでヲロチ退治等、『古事記』内部の個別の話のまとまりを中心に議論されてきた草那芸剣の『古事記』における終始を捉え、そのあり方を明らかにした点に新味がある。また阿遲鉏高日子根という『古事記』における存在意義が問題となる神について、刀剣という視点から新たに定位した。国神側、葦原中国側の刀剣をどう『古事記』が語るか、という問題で草那芸剣と連続している。

第三部の八章では『日本書紀』が神代伝来のクサナギの剣を神威ある刀剣と認めつつ、

律令を以て秩序の内に絡め取ろうとする様子を見た。『日本書紀』もまた、『古事記』と同様にクサナギの剣を秩序の内に組み入れようとする。第九、十章は、直に第一部第二部と関係しないが、共通する刀剣の性質を見ることがもできる。ただしその働きは大きく異なっており、第一部第二部の『古事記』の刀剣の特徴をより明らかにするものとなっている。

第一章 『古事記』における火神被殺―迦具土殺害と刀剣神の生成

迦具土の殺害場面は、火神殺害に伴い様々な神が生まれるとあって、刀剣の制作過程や、噴火現象、陰陽五行説など、神話的表象の面から解釈されてきた。先に触れた新旧信仰の融合という前掲酒井論の視点も、こういった神話学的な先行論に基づく。

所謂迦具土殺害の神話では、伊耶那美之死を悲しむ伊耶那岐が、その死の原因となった火の神迦具土を刀剣で斬り殺し、血や刀や聖なる石群などによって神々が生成する。この神々は、切り裂く力の神など、刀剣に関わる神と言われている。この箇所には、刀剣の制作過程や、噴火現象、陰陽五行説などに関連させる解釈がある。また前掲酒井書は、この箇所から火と雷と刀剣の関係を、新旧信仰の融合という側面から考察している。しかし西郷信綱『古事記注釈』第一巻（平凡社 1975）が指摘したように、この箇所だけ切り取るのではなく、『古事記』の一部として、『古事記』の文脈の中で捉える必要があるだろう。神話的表象の分析が間違いというよりは、それだけでは『古事記』の神話として十分に捉える事ができない面が出てくるだろうということである。

『古事記』の話として読むことで、この神話が、性行為による国土生成、自然の神の生成、陰部を焼かれ病んだ伊耶那美の身体からの資源の神の生成に続いて語られている事に気が付く。地上世界が生成していく神話の中に、唐突に一武器の神の誕生が語られている。しかも一柱ではない。これだけでも『古事記』の中で刀剣が重要な位置を占めている事がうかがわれる。さらに言えば、前の文脈に注意する事で、性行為や、病の身体ではなく、斬殺で血が飛び散る中で刀剣の神々が生成した事の問題が浮かびあがってくる。またここで生まれた建御雷神は、後の国譲り神話や神武東征譚といった天皇王権の主要な征服活動において決定的な役割を果たす。この神は、後の展開における描写から、刀剣そのものの神であると見られる。何故ここで、このようにして刀剣の神々の誕生が語られるのか。また、建御雷がこのようにして誕生した意義は何か。これらの神々が、伊耶那岐の刀剣によって誕生したと叙述される事を軸に、読み解いていく。刀剣に着目することで、『古事記』の一部としての迦具土殺害神話の問題が顕在化し、『古事記』における刀剣の本質に関わる問題も見えてくる。そして建御雷の存在からは、刀剣と征服の問題がある事が示唆されるが、それについては第三部で後述する。

第二章 フロチ退治における刀剣の獲得

もうひとつの刀剣獲得の話はフロチ退治神話である。高天原を追放された須佐之男が、地上で国神を悩ますフロチという怪物（蛇）を退治し、フロチの体内から草那芸剣を得て、天照に譲渡する有名な話である。この神話は、古い神（フロチ）が信仰を失い、新しい神（須佐之男）に交代するという枠組みで読まれる事が多い。間違っていないと思われるが、刀剣に着目したとき、この枠組みでは、草那芸剣の発見と天照への譲渡の意味を説明できない。怪物退治の単独の伝承ではなく、『古事記』のフロチ退治神話の理解のためには、むしろこの刀剣の発見と譲渡の部分が重要なのではないか。特に新旧の神など、異質な存

在が衝突する中で刀剣が出現する事が注意される。『古事記』の読解のためにも、刀剣の探求のためにも、ヲロチ退治を通して刀剣が出現する論理を捉える必要がある。また、ここで獲得された草那芸剣は、『古事記』の後の箇所でも何度か記述される。ヲロチ退治神話といった既存の物語単位を超えて記述されており、このような草那芸剣の伝来を捉える事も、『古事記』と刀剣の理解にとって重要であると考え。草那芸剣の伝来については、章を改めて考察する。

第二部は、刀剣の形質に関わる問題を取り上げる。ここでは、物としての刀剣の性質が、物語内容と深く関わっている話について考える。具体的には、刀剣の所持と伝来についてである。

第二部 武器としての刀剣と『古事記』の物語

第一章 『古事記』における草那芸剣一剣の遍歴譚として読む試み

草那芸剣が『古事記』の複数の箇所にまたがって記述される事は既に述べた。草那芸剣は著名な刀剣であるためか、この刀剣に限っては様々な考察がある。しかし、そのほとんどは特定箇所の読解の為の一要素として草那芸剣を取り上げるものであった。しかし『古事記』における複数の草那芸剣の記述は、連続性を持って描かれていると見られる。したがって、『古事記』の草那芸剣を捉えるには、その連続性の中で草那芸剣を考えなければならないのではないかと。そこで、既存の物語単位を超えて、草那芸剣の記述を連続したものとしてとらえ、いわば剣の遍歴譚として読み直す。そうしてみると、草那芸剣は所持者を変えながら移動していく事が分かり、所持者の性別によって刀剣との関わり方が異なる事が見えてくる。草那芸剣の遍歴譚の読解には、刀剣の伝来と所持、そしてジェンダーの問題が関係してくる。

第二章 大雀の佩かせるタチー刀剣を身に帯びるという事

そういった刀剣所持の問題がより明確に表れているのが、応神記の歌謡、大雀命（後の仁徳天皇）の佩刀をほめる吉野国主の歌である。

この歌謡からは、身に帯びることと刀剣の靈威が盛んになる事の関係がうかがわれる。この歌謡は、後に仁徳天皇となる皇子を称賛するものであるが、歌謡の解釈ふくめ、その内容が如何に仁徳記につながっているかなど、明らかになっていない部分も少なくない。そういった点で、刀剣という視点から新たな読みを提示する事ができると考えている。先に見た神武東征譚では、伊波礼毘古が刀剣を受け取った瞬間に、敵は倒れ味方は回復し伊波礼は「天神御子」へと変わる。また、『古事記』には佩いている刀剣を抜く、という意の定型句がある（「抜所御佩十拳剣」など）。刀剣を身に帯びる、という事に意味があったと推測される。応神記の歌謡の読解を通して、『古事記』における大雀命の佩刀ほめの歌の意義と、刀剣を身に帯びる事の意味を考えてみたい。

第三部は征服と刀剣についての話である。刀剣は武器であるから戦争に関わるだろうというのは誰でも思いつく事ではあるが、迦具土の所で触れたように、『古事記』でも刀剣は征服行為と深く関係している。建御雷が働く国譲りと神武東征、それから倭建の東西征伐、神功皇后の韓半島征服についてそれぞれ章を分けて考察し、合わせて第三部「『古事記』の征服譚と刀剣」とする。

第三部 『古事記』の征服譚と刀剣

第一章 「剣刃」に変わる手—『古事記』国譲り神話における「力競」

国譲り神話では、葦原中国を天照の子に献上させるため、高天原の神が地上の神と交渉する話であるが、何度も失敗する交渉を成功させたのが、刀剣神・建御雷神であった。交渉過程はいくつか段階を踏むのであるが、刀剣という観点から言うと、建御雷が国神の建御名方と「力競」をする箇所が注意される。従来この「力競」は付随的なものとしてあまり注意されてこなかったが、『古事記』の国譲り神話の理解と刀剣の働きの理解にとって重要な箇所であると考えられる。「力競」は相手の手を交互に取り合う勝負として描かれる。しかし建御名方が建御雷の手を取ると、建御雷の手は「剣刃」に変わり、建御名方は何もできずに退いてしまう。約束事がある勝負の中で、勝負のかたちに添って、刀剣の触れがたいという威力が発揮されている。何故、勝負のかたちが守られるのだろうか。この建御雷が準じている勝負の約束事にはどんな意味があり、国譲り神話全体、『古事記』全体の中で、どのように位置づけられるのか。また、そういった勝負の型の中で刀剣の威力を発揮する事にどんな意味があるのか。刀剣の特質の問題としても、『古事記』の論理の問題としても、重要である。またこの問題は、『古事記』における戦いの様式性を考える端緒ともなる。

第二章 神武東征における「横刀」の授受—刀剣授受による転換点

神武東征譚は、「天下」の「政」すべき地を求めて伊波礼毘古らが東に向かい、ついに倭へ至って天神御子（伊波礼毘古）が初代天皇となる話である。途中、土地の者や荒ぶる神に阻まれ、窮地に陥るが、その際に高天原から建御雷の刀剣が降され、それを受け取る事で危機を脱し、以後勝利を重ねて倭に至る。この箇所に関しては、刀剣の授受が倭に至り天皇となる為の決定的な分岐点となっている事が既に指摘されている^{*1}。伊波礼が刀剣を受け取ると、荒ぶる神の為に失神していた伊波礼と軍勢は目を覚まし、荒ぶる神は自ずから切り伏せられ、伊波礼は「天神御子」に変化する。物語の重要な転換点であり、刀剣の働きが物語読解と刀剣研究の両面で問題となる。第二部を踏まえて考察したい。また刀剣授受以後、神武東征において刀剣による過剰な殺害が叙述される事も注意される。

国譲り神話、神武東征譚と、天皇の支配領域獲得において刀剣は決定的な働きをしている。『古事記』における天皇王権の征服にとって刀剣は重要な意味を持つ。また天皇王権による征服は天皇の起源と継承を語る『古事記』にとって、少なくない比重を持つ。

第三章 倭建東西征伐と刀剣

そしてこの後、二度ほど簡単な征服記事が記されるが、詳細な征服譚としては倭建の西国征伐と東国征伐があげられる。この東西征伐においても、それぞれの方角に向かう際に、刀剣を携帯して行く事が言及され、かつ征服譚の中で繰り返し刀剣のモチーフが様々なかたちで叙述される。刀剣という側面から倭建の東西征伐を読み直し、刀剣と征服のあり方の一端を探る。（この箇所は、出雲建との「刀合」、「タチハケマシヲ」の尾張の一松、草那芸剣の携帯など個別に論じた方がいいかも。もしくは、先に草那芸剣で東国征伐は述べたので、西国征伐のみ述べるとか）

第四章 息長帯比売の新羅征服の特質—刀剣を持たない征服

そして、第三部の最後には神功皇后の韓半島征服を取り上げる。これまで取り上げた征

*1井上隼人「「国を平らげし横刀」授受の意義—『古事記』高倉下の献剣段の考察」『古代文学』（52）古代文学会 2012

服譚に、この韓半島征服譚を入れて、「天下」の領域が定まると言われている^{*2}。しかし、この神功皇后の話には、刀剣の要素が見受けられない。天照・墨江三神の託宣と助力によって、征服が成功するという、神功皇后の巫女の活躍が目立つ話である。しかし、刀剣が前面に現れないからこそ、なぜこの征服だけ、刀剣が現れないのか、という問題設定が可能になる。その際には、墨江三神の名に、「筒之男」とある事も注意される。「筒之男」はいまだに神格がはっきりしない神であるが、建御雷とともに迦具土殺害で生まれた神の中に「石筒之男」という神がいる。石筒之男は刀剣の神という指摘もある。神名解釈と共に、刀剣という観点から神功皇后の征服譚を読み直す。刀剣と神功皇后の征服譚がどう関わるのか、関わらないのか、考えていきたい。

第四部 『古事記』と見えない刀剣

第四部は、「隠れた刀剣」として、刀剣が前面に現れない箇所を対象に、刀剣という観点から読んでいく。神功皇后の征服譚のように、刀剣に関係しそうな話であるのに、刀剣が現れない話を取り上げ、読解していく。

第一章 軽太子の失脚と弓矢の話—矢の起源譚が表すもの

天皇王権の対外的な征服や平定において、基本的に刀剣の存在が前面に出る事は既にみたが、一方で『古事記』には皇位に関わる争い、殺し合いが見られる。こちらの場合、あまり刀剣が前面にでない。同じ殺し合いであるのに、なぜか。これまでの見てきた『古事記』の刀剣の論理と、国譲りの際に考察した争いの型の問題を踏まえながら、考えていく。その際には特に軽太子の失脚の話を取り上げて中心的に論じていく。この話では、軽太子の近親相姦と、政治的失脚とが主な論点として論じられている。確かにそれはこの話を理解する為に重要である事は間違いない。しかし気になるのは、この話の中に、弓矢の起源の話が存在する点である。人心を失った軽太子が臣下の家にこもって弓矢を作り、それを知った兄弟の穴穂王も弓矢を作る。それぞれ、軽矢、穴穂矢といい、穴穂矢は今使っている矢であるという。このような起源譚が、軽太子の失脚の話の中にある意義はなにか。弓矢の性質を考慮しながら、軽太子の話を読み直し、あわせて、刀剣を使わない殺し合いというものについて考えていく。

第二章 刀剣を振るう大長谷王—雄略天皇像の考察

軽太子譚を通して、皇族同士にはほとんど刀剣が使用されない問題を考えると先に述べた。ほとんど、というのは例外として大長谷王（後の雄略天皇）が居るためである。そこでこの章では、皇族に刀剣を振るうという観点から、例外的な大長谷、雄略天皇の天皇像を考察する。そしてその考察を通して、皇族間での殺し合いについても考える。雄略天皇の人物造形については既に多くの論考があり、皇子時代の暴力性と、天皇時代の色好み、神との直接的関わりなどが指摘されている。こういった先行研究を踏まえながら、刀剣に着目する事で、雄略天皇像に関して新しい側面を提示したい。

^{2*}神野志『古事記の世界観』（注5）。「ヤマトタケル（「景行記」）までにおける大八島国の「王化」の完成と、応神天皇において韓半島を「王化」のうちに組みこむこととをつうじて、「天下」の構造を達成するのである。」（171p）とある。これは、韓半島（朝貢国）を得る事で、中華帝国の冊封体制を模倣し、「小帝国」を達成する為であるという。

第三章 阿治志貴高日子根神の存在一天若日子神話における存在意義

もうひとつは、阿治志貴高日子根神について取り上げる。この神は、国譲り交渉に失敗した天若日子と全く同じ姿の神として現れる。死んだ天若日子に間違われた阿治志貴高日子根は怒り、喪屋を破壊し飛び去ってしまう。その際、神の正体を明かし、賞賛する歌を妹が歌う。この神は雷神の性格を持つという説があり、雷神は建御雷がそうであるように、刀剣と関係する。また、この神は国神で唯一「十掬剣」を持つ（「十拳剣」「十掬剣」は巨大な神の剣で、このほかは天神のみが所持する）。いまいち国譲り神話の中で存在意義のわからない話であり、刀剣の観点から新しい読みを提示したい。

以上のように、刀剣という観点を持つことで、『古事記』の読解に関して様々な新しい視点を持つ事が可能になる。また、『古事記』の読解、つまり『古事記』の文脈に即して刀剣を捉える事で、これまでの『古事記』を材料とした刀剣研究では追求できなかった刀剣の一面を明らかにする事も可能となる。刀剣という観点を持った上で、『古事記』の文脈に即した読解を行うことで、『古事記』研究と刀剣研究が見落としてきたもの捉えたい。

第五部 『古事記』以外の刀剣

本研究では、刀剣に着目した『古事記』の読解を通して『古事記』に現れた刀剣のあり様を分析し、また、『古事記』の読みを更新しようとしている。そのため当然『古事記』が対象となるが、同時代の文献における刀剣のあり様を分析し、『古事記』のそれと比較することも意味がある。比較によってそれぞれの文献における刀剣の特徴も明確になり、また、上代における刀剣の現れ方を探ることにもなる。具体的には『万葉集』の刀剣について分析する。

第一章 刀剣枕詞「剣大刀身に添ふ」の論理—『万葉集』巻二195～196番歌^{*3}から

『万葉集』の枕詞には、刀剣を用いたものがある。この章では、そのひとつである「剣大刀（剣刀・ツルギタチ）身に添ふ」について、それがどのような論理に基づいて成り立っているのか、ということを明らかにする。万葉集巻二195～196番歌（相聞歌）においては、この枕詞がかかる「身に添ふ」の主体が問題にされてきた。本章では、この枕詞の用例検討を中心に、この枕詞がどのような論理に基づいて成り立つものかを分析することで、その問題に決着を付けるとともに、刀剣との関わり方の男女の別を明らかにする。ここで明らかになる刀剣とジェンダーのあり方は、あくまでこの枕詞に関わることであるが、『古事記』に見た刀剣と性別の問題と比較することは無意味ではないであろう。

³*通例、巻数をアラビア数字、歌番号を漢数字にした、2一九五というような表記が一般的であるが、歌番号の方が後世に付されたことを考慮して、本研究では通例とは逆の表記をとる。